



太陽の季節・行為と死

石原慎太郎

Roman Books



太陽の季節
行為と死

220 円

昭和 42 年 10 月 4 日 第 1 刷発行
昭和 44 年 9 月 8 日 第 4 刷発行

著 者 石 原 慎 太 郎

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

振 替 東 京 3 9 3 0

電話東京 (942) 1111 (大代表)

印刷所 極東印刷株式会社

製本所 若林製本株式会社

© 石原慎太郎 昭和四〇年

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

Printed in Japan

太陽の季節・行為と死

石原慎太郎



Roman Books

装
幀
司
修

目次

行為と死	セ
太陽の季節	100
処刑の部屋	一五
完全な遊戯	一七一

太陽の季節・行為と死

行為と死

スエズ

遠く背後で燃えているマナハ地区の建物の火を除けば、辺りに見える明りはなかった。

この町に戦闘が開始されて僅か数日ではあったが、革命後、子供までの市民がどんな訓練を重ねて来たとは言え、最も新しい兵器で重武装した敵軍が、孤立したこの町を陸海空の三方から押し包んでの攻撃の前には、すでに闘いの結着は眼に見えていた。

それでも全面降伏を呼びかける敵軍に従わず、未だにゲリラに姿を変えた戦闘が方々で行われている。

事実、首都カイロからとどいた通達は、全国民最後の一人まで銃を取って侵略と闘え、だった。

防戦した軍隊が潰滅して姿を消した後、なお執拗に市民の抵抗はつづいている。業を煮やした相手の攻撃は段段に野蛮となり、戦闘員、市民の見境のない攻撃がくり返され、最も執拗な抵抗をつづけるマナハ地区アバティ

ストリートの住民に向って、抵抗を止めなければ人質の市民五人ずつを毎日犠牲として銃殺するという通告が、昨日英軍の手で行われ、実際にその処刑が行われていた。

しかし、今も見る通り、マナハの街に銃火は絶えることがなかった。マナハに限らず、海岸線から内陸へ、カイロを目ざして侵略しようとする英仏軍を食いとめるために、ポートサイド市の内外に、大小、さまざまな形で戦闘が続いている。

ポートサイドの中心部を占拠しながらも、それ以後の英仏軍の侵略の速度は、敵をその地に足止めしようとする市民の必死の反撃で、著しく落ちていた。

街路に灯りはなくとも、眼をこらせば澄んだ夜空の星明りで道筋をちがえることはなかった。

車は爆撃で崩れた家の壁で両側ともフェンダーがつぶれ、ライトは役にたたない。キイを入れ、エンジンが始動するのが不思議なくらいだった。

エウゲニアヴェニユを左へ折れ、シスメイルストリートに出る。一ブロックいった角にあったセムフッドのキャプエは爆撃に壊されすでに面影もなかった。

幅広い通りには全く人影がない。この辺りは英仏軍に完全占拠されている地域だが、彼らの姿もない。夜間の

ゲリラを怖れてだろうか。こうしてただ一人、夜間、車を駆っている皆川にも、英仏軍の兵士と同じ危険がないとは言えない。

彼が今向おうとしている仕事に、彼をおもむかしめた仲間たちからこの地域の市民兵に連絡は取られている筈ではあったが、どんな手違いがあるかも知れぬ。

まして、市街を封鎖した英仏軍が彼を見咎めた時、どんな手を加えるかは全くわからなかった。検問なしの、即座の銃撃ということもあり得た。

後の窓から、手製の日の丸がたらしてはある。しかしそれとても夜目に遠くから確かめられる筈はない。

周りにあるかも知れぬ眼から隠れるというよりは逆に、こわれて使えぬクラクションの代りに時折クラッチを切りエンジンを空にふかして鳴動させながら、皆川はゆっくり車を走らせつづけた。

車を乗り捨てるところまで一マイルにも満たぬ距離だが、速度を落した車のなかで、いつ浴びせられるかも知れぬ銃火を怖れつつ進む行程は、千倍の遅さにも感じられた。

レセプスの銅像のあったレセプス通りとの交叉点にかかった時、間近前方に銃声がし、眼の前の舗道に青い光をたてて銃弾が跳ねた。

停車した車に、

「誰か。どこへいくのか」

誰何する英兵の声が響いた。

闇をすかして見る眼に、数十米先のバリケードに動く人影が見える。

「家へ帰る。俺は外国人だ。通してくれ」

皆川は英語で叫び返した。

徐行し、彼らの眼前で停止した車を囲むように四五人の兵隊が立った。皆川の言った、外国人という言葉を私語し合う声が聞える。

「外国人とは何人か」

声が聞いた。

「日本人だ。窓の国旗を見てくれ」

皆川の名乗った国籍が意外だったか、周りでざわめく気配があった。

小さな明りが一瞬だけ彼の顔を照し出して消えた。

「外交官か」

「違う。商社のカイロ駐在員だ。ポートサイドに入った貨物船に用事があって来ているうち、戦争になった」
説明に嘘はなかった。

「何で今頃」

とはいえ、夜ではあったが未だ十時前だ。陽が落ちてきて、ようやく夜の闇が地上を覆いつくした時刻だった。

「当地にいる友人が大怪我をし病院に入れられた。尤も、その男は病院に入った後、君らが病院に加えた攻撃で更に大怪我をしたそうだ。彼を見舞いにいつていて遅くなった。一時間前、彼は死んだがね」

誰かが何か言い、言われた人間が離れると間を置き他の誰かを連れて戻った。

士官らしい男が顔を覗かせた。男に向って皆川は、彼らに言ったと同じことを話した。

「パスポートはあるか」

皆川がとり出して示したパスポートを受けとると、手元に隠した明りで確かめ、その灯を向け皆川の顔を照らす。

士官が読み上げる名を、従兵の誰かが手元に記している。

「夜間の通行は禁じている筈だ」

「いや、我々外国人は何の通達も受けていない。何が何やらわからぬままだ。一体、これは正式の戦争なのか、それとも——」

「戦争だ」

遮るように言った。

「戦争としても我々には訳がわからない」

士官は何も答えず、代りに行く先を質した。

この道の先を右へ折れた埠頭の先近くにある業者のク

ラブの番地を答えた。

「トランクを開けろ」

兵士たちが開けられたトランクの中を捜す間、士官は彼の座席の辺りを明りで照し出した。

手にしたパスポートを返そうとしながら、士官はもう一度それを眺め直す。

彼らにすれば、近東とはいえこの町の戦場で思いがけず見かけた日本人の意味を判じかね、その扱いに戸惑うのがよくわかった。

「カイロにはいつ帰れるだろうか」

答える代りに士官はパスポートをさし出した。

「通れ。但し、今後夜間の通行は一切禁止だ」

皆川は頷いた。なお胡乱気に見守る彼らの視線を感じながらギアを入れた。

「戦争はいつ終るのかね」

「知らんな。あの黒いうるさい蠅どもに訊いてくれ。一体いつ止めるつもりだと」

吐き出すように士官は言った。

“蠅か——”

彼は思った。思いながら彼の連想は何故かすぐに、このポートサイドに限らず、全エジプトの町中に張られた彼らの指導者の肖像を想い起させた。

写真だけではなく、実際に眼にしたナセルの姿が重な
って眼に浮んだ。六尺を越す大柄な体軀。体だけではな
く、彼の体の部分はすべて巨きく見えた。巨きな鼻、巨
きな耳、張り出した顎、そして、半年前、来埃した社長
を建設相との会談に案内した折、役所の廊下で若い建設
相に紹介され握り合った彼の厚く巨きな掌。

その当時、そして今は更に、彼が革命後の国家の指導
者としてかかえているものの大きさについて概略は知り
ながら、相手へのしかり包むようにして握手して来る
彼の手に触れた時、皆川はこの男が並外れて巨きなその
体の上にかかえている、並外れて大きなものについて初
めて感じたような気がしたのだ。

侵略した英軍の将校が吐き出すように言った言葉を、
車を駆りながら皆川は反芻していった。

あの士官が、あの男と、自分がしたと同じように向い
合った時も、彼は同じようにあの男のことを蠅と呼ぶだ
ろうか、と思った。

しかし皆川がその手の巨きく熱い感触を知っているあ
の男を持ち出す前に、士官が吐いた言葉はあるところで
当っているとも言えた。皆川自身が、同じような感慨で
彼らを眺めたことはなかったか。

ギザの巨大なモニュメントの周りで観光の客たちにま
つわり群がる黒く卑小な人間たち、オールドカイロの下

町の薄汚れたバジャマに似たガビラで巢食う下層の市民
たち、それらを培う熱気と臭気の中に、彼らは確かに蠅
とも見られた。

いや、四年前の無血革命後、市中で度々持たれるナセ
ル始め閣僚たちの演説集會に群がり熱狂し、市中を行進
する市民たちを、皆川は時折、あの英軍の士官が吐いた
言葉と同じような感慨で眺めたことがある。

それは、彼の事務所のあるスリマンバシャの、完備さ
れたオフィス街や、美しく整った高級要人の住むザマリ
ックやガーデン辺りの高級住宅地で感じるカイロ、エジ
プト、エジプト人たちとは全く違って、見守る眼にもつ
と生々しい何かをつきつけた。

そしてそれらが、その蠅たちが、あのナセルがくり返
して言う、真実のエジプトであるに違いない。

士官の吐いた言葉は、この今になって皆川に忘れてい
たものを思い出させた。真実のエジプト、或いはエジプ
ト人に対して自分が抱いた初めの感慨が、表現の形とし
ては決して違っていないのを彼は感じる。

危険な暗黒の市街をたった一人車を駆り、検問をよう
やく抜け、その先に更に危うい目的に向おうとしなが
ら、皆川は今あの士官の言葉を契機に胸の内に蘇ったも
のと、今こうしてこの仕事に向いつつある自分との組み
合わせを奇態な感慨で考え直していった。

彼らは確かに蠅であった。

この数日の戦鬪に彼らは蠅のように容易に、蠅のようにきりなく殺されていった。そして、彼らは今なお、蠅のように執拗に闘いつづけていた。

その執拗さは侵略者の英仏軍の兵士にとって、あのスフィンクスやピラミッドの足場で、旅客にまつわりついて駱駝をすすめ、スヴェニールを売りつけ、果ては、ただ金を無心するしつこさと同じものだったかも知れない。

そしてそのいづれもが、ナセルの言うが如くに、過去数百年の圧制と貧困から生れたものであるのかも——。しかし、その詮索は、今皆川にとって一切不要なものに感じられた。

徐行する車のフロントグラスに額を押しつけ、折れて曲った街角から更に行く先を確かめながら、彼はそうしたことがらについて、今自分の内に、この数日以前の過去と比べて、決定的に異なる、何かが在ることを知っていた。

それはたった一つ、実に簡単なことがらによってもたらされたのだ。

皆川は彼自身、今、あの士官が言った、蠅であった。少くとも、彼を今、ここへ指し向けた仲間はその言ったのだ。

果してそうであるかどうか、そのことは皆川にとってどうでもいいことに思われる。

彼にわかることは、突然スエズへの侵略が始ってこの数日、彼は彼らと一緒にいた、ということだけだ。そしてそのことが今この仕事を選ばせ彼をおもむかせたのだ。

彼はそれを今夜選んだのではない。すでに彼は選んでいた。

三日前、バーケットディグデイの飛行場に英軍バラシュート部隊の最初の降下があった時、射ち殺された友人イスマイルの銃を彼が取り上げ空に向けて放った瞬間から、彼は選んだ自分を覚っていたのだ。

スエズの侵略は、彼には関らない事件であった。皆川と同じ国籍を持つ人間たちの中には、たとえ今このスエズの地になくとも、彼らが抱えているある精神、ある観念からすれば、彼らはこの事件の内に敵を決め味方を決することが出来たろう。この事件について、侵略側の英仏が、或いはそれを防いでいるエジプトが、宣言した意味を認めることが出来たろう。

しかし少くとも皆川にとっては、この戦鬪は、たとえそれが片側の謀略であり、侵略であろうとも、全く関らないことがらの筈だった。

一九五六年、十月二十九日、イスラエル軍がシナイ半

島で国境を越え、その翌日、イスラエル空軍の爆撃が始ってからも、彼はカイロへ引き返し、或いは更に安全な外地へ、この戦争をかわして逃れることが出来たのだ。

しかし彼はポートサイドへ踏みとどまった。それも決して、彼がその時、この事件に関しての自分を選んだからではない。スエズへの空襲が始ったその時も、彼はまだ傍観者でしかなかった。彼は一刻も早くカイロへ、そしてそこが危険ならば外国へも移ろうと思っていた。

が、彼は一人の人間を説得しカイロへ連れ戻すためにその時機を遅らせたのだ。

そしてその人間、ポートサイドを故郷としこの町に家族を持つフアリダは、彼の誘いに肯んずることがなかった。

皆川は侵攻がこれほどまでの戦闘になるとは予想してはいなかった。それにしても当然起るだらう危険は充分予知していた。それでもなお彼が、とうとうポートサイドが封鎖されるまでこの地にとどまったのは、ただフアリダのためでしかなかった。

彼を、この激しい戦闘の危険の中に晒させたものは、結局、愛であつたと言うのか。

危険の最中に、彼はその時になって初めて、自らのために愛という言葉を持ち出して考えた。多分、今までの彼の人生の中の初めての体験として。

そして自ら持ち出したその言葉に彼はまごついていた。

勿論、それ以前に、皆川は彼女に対する自分の気持ちを愛という言葉で伝えはした。しかし、それはなんと言おう、彼ら二人に限らぬ人間の社会一般の、或る特殊の場合のいわば常識的な方法として使われただけだった筈だ。

そのことを皆川は今になって知るのだ。

彼女に関りある己の行為を、己の生命とのかけがえにおいてとったことを知った時、彼はその行為の最も根源的な衝動について自問してみた。

たとえば、カイロでの今までの二人の間をそう説明することは出来ても、今それをただ彼女への執着、と呼ぶことは許せぬと思った。

——それならば、俺は本当に愛しているのだ——
自らを説くように彼は思った。

そう説くことで、彼は自らの内に知らなかった自身を、覆われたその皮を剥ぎ、初めて己の眼の前に晒したのだ。しかしながら、それは彼にとって信じ難いことにも思われた。

今、自らへそう説いて知らすことが、今はもう新しく何をも生みはしない。その余地すらないというほどのこの極限的状况の中で、そう知らされながら彼はもう一度

そのことを自らの手で自らへどうにかして現実に証した
いと思つた。

車はシスメイルストリートを脱けきり、シャリヤアズ
ミにかかる。整然と並んだ街の区画は終り、カイロから
の鉄道の終着駅を過ぎると、運河港湾関係の事務所、倉
庫、関係工場の並んだ区域に入った。高い壁に間隔に開
いたゲイトをくぐると、左手はすぐに港のスリップと海
だった。

アルセナル繫船渠を過ぎ、三十番ゲイトの前で車を止
めた。

ゲイトの格子は片側が壊れ開け放されたままになって
いる。扉に寄せて車を止めて下りると、皆川はゲイトを
脱けて埠頭へ入った。

運河地区の海軍司令部のあったこの埠頭は、重なる空
襲で完全に破壊され、星明りに見渡した辺りには人の気
配は感じられない。たてこんだ高い建物が潰滅し、その
残骸だけが残る広い埠頭は夜目にも茫々たる廃墟だっ
た。

それでもなお、足音を忍ばせて石畳の上を歩いた。保
税倉庫と税関の焼け跡の間にどうにか車の通りそうな余
地がある。

運ばなくてはならぬ荷物の重さからしても出来る限り

車を使いたかった。

しかし、埠頭の先端まで車を運べたとしても、そこか
ら目的地である埠頭の裏側になるシリフベイズインを横
切り隣のアバスヒルミベイズインとの間に出た、埠頭の
先端に舫つかれた汽船まで、水上約千米の行程がある。

出来ることなら隣の埠頭まで車でいきつきたいが、埠
頭の根元にある、発電所への鉄道分岐点に英軍の分司所
が出来ている。そこが占領し送電を中止した発電所への
司令の中継地だった。

たとえそこを通過出来ても、その近くから埠頭へ潜入
して作業するには、発見される危険が多くあった。それ
に運河港湾の最も狭窄した目的地は、兩岸の陸地から監
視の眼も敵しかろうし、必然、目的地への到達は途中か
ら水の上をたどらなくてはならぬ。

ゲイトまで引き返し、止めていた車を埠頭に乗り入れ
た。先端から五十米近く手前で、崩れた海軍倉庫の残骸
に邪魔され車を止めた。

そこまで来ると水の上を伝う夜風に乗って、潮の香が
する。見上げた夜空に、落ちかかるように間近く、銀河
が光った。

確かめるように見つめる前方の水のはるか彼方、対岸
のポートファウドの市街に、ぼんやりと火の手が上って
見える。砲声は聞えなかった。

煙草が吸いたく、思わずポケットを探りかけ気づいて止めた。

皆川はこれから行おうとしていることの意味をよく知っている。そしてその危険さについても。

ポートサイドが陥落した後、侵略軍は当然首都カイロを目指す。その最も容易で手取り早い方法は、運河を下り、途中のイスマリヤ市を落して東からカイロを攻めることだ。

彼我の誰しもがそれを予想していた。そして守る方はまず、英仏軍が兵力を最も容易に動かすことの出来る汽船を使ってイスマリヤに到るのを食い止めなくてはならぬ。方法は即ち、運河の閉塞である。

殆ど潰滅したポートサイドの防衛軍に出来ることはただ一つ、運河の港湾に止った船を沈めて水路を塞ぐことだ。

しかし今となつては、そのために船を動かして運ぶことは不可能だった。残るのは、港湾中に停泊しているいずれかの船舶をその場で沈める方法しかない。

しかし、水路の幅広い部分に船を沈めても役にはたたぬ。が、運河の奥手の狭水道部分には停泊している船は無かった。

他を見渡し、守備側が選んだのは、シリフとアバスヒルミベイズインの間の埠頭の先端に舫もわれたままでいる

エジプト海軍の輸送船ゾエラ号だった。

輸送船が止っている地点は、対岸のポートファウドの埋立二号島との間隔が港湾中最も狭い。四千噸のゾエラ号を、何らかの方法で舫いを切り、岸を少しでも離して沈めれば、他の大型艦船の運河進行は完全に阻むことが出来た。

守備軍が考えることを、当然、相手も考えた。前日、前々日の二度、夜間に行われた陸上からの試みは、近辺を固めた英軍の銃火で完全に鎮圧撃退されていた。

残された方法は水の上からしかない。それとて、相手が水の上にもどれほどの警備を敷いているかはわからなかった。

そしてこの二日間の市街戦で英仏軍の制圧は一層拡がって徹底し、目的への接近すら困難となっている。水の上からとはいえ、極端に離れたところから近づいていく訳にはいかない。地上には市民兵のゲリラの跳梁はあっても、水と空は完全に相手側に制圧されていて、港湾を過ぎるエジプト側のいかなる舟艇も、発見と同時に即座に、港湾中に停泊した英仏軍の艦船の砲撃で沈没させられた。

残された水路を伝う方法も、人間が泳いでいくしかないのだ。そして、その限界点まで到達するのに最も可能性ある人間として、皆川が選ばれた。いや、彼自身が申

し出たのだ。

先刻、車を下りて見た時には気づかなかったが、海の上にいる砲艦の探照燈がゆっくりと辺りを照し出した。強烈な明りが低い仰角で、じりじりした速度で埠頭を照して過ぎる。

建物の残骸に遮られて直接照し出されはしないが、夾雑物の反射で残骸の谷間の辺りも明るくなる。

皆川は思わず身構えるように辺りを見廻した。

移っていく光に従って、崩れ落ち焼け朽ちた建物の残骸が異形な影を作って次々浮き上って来る。自動車に寄り添い、息をひそめて皆川は巨大な光の輪を見送った。たった今照し出しそこねた彼に気づいて今にもその輪が急転し自分を捉えに戻って来そうな気がしてならぬ。

皆川は手元の時計を見、その光が弧を描ききりもう一度元へ戻って来るまでの時間を計った。間隔は六分あった。

後の扉を開け、固く、閉められている座席の上側を金具を使ってこじ上げはがし、下に収められた爆薬を取り出す。時限装置がつけられ、圧縮された強力な爆発力を持つ爆薬は、見かけよりもはるかに重かった。

船尾の舵の基部に仕かけて船底に穴を開ける爆弾はそれだけで四十キロある。加えて二つ。船を停めた舫い

断つ爆薬が二個。

舫いを外された輸送船は、丁度時刻の強い上げ潮に乗って岸壁を水路に向って離れ、五分後に船尾の船底を爆裂し半時間後には水路の中央近くで座礁する手筈だった。

合わせて六十キロに近い三個の爆弾を約一軒離れた目的物までどうやって運ぶかだ。

船は無い。勿論担いでは泳げない。方法は、港湾一杯に漂い流れる種々の残骸物にまぎれ、筏を組むか、何か大きな浮游物に載せ、上げ潮に乗って運ぶよりなかった。

その手筈のための、ロープも用意してある。

この期に及んで慌てはしなかった。打ち合わせは細心にくり返し、これから先にすべき手順もすべて知り尽している。

闇の中で更に眼を閉じれば、今かかえている爆薬の重み、感触と同じように、泳ぎつき、それをしかける船の吃水間近の錆びて荒い鉄板の感触さえ予感することが出来た。

すべきことについてはすでに知り尽していた。

ただ、潜めて運んで来た爆薬をかかえて下ろす瞬間、皆川には改めて、今こうしてここにいる自分自身が不思議な感慨のうちに感じ直されるのだった。